ケブカクロオホアリ* (*CAMPONOTUS HERCULEANUS* SUBSP. *VAGUS* VAR. *YESSENSIS* TERANISHI) に就いて

森　下　正　明

京都帝國大學農學部昆蟲學研究室

[Notes on *Camponotus herculeanus* subsp. *vagus* var. *yessensis* Teranishi (Hymenoptera, Formicidae). By Masaaki Morisita]

[MUSHI, vol. 13, no. 2, p. 93—96 Feb., 1941]

ケブカクロオホアリ*（*CAMPONOTUS HERCULEANUS* SUBSP. *VAGUS* VAR. *YESSENSIS* TERANISHI）に就いて

森下正明
京都帝國大學農學部昆蟲學研究室

[Notes on *Camponotus herculeanus* subsp. *vagus* var. *yessensis* Teranishi (Hymenoptera, Formicidae). By Masaaki Morisita]

Camponotus herculeanus subsp. *vagus* var. *yessensis* Teranishi の記載は故寺西暢氏の遺稿の中から見出され，同氏遺稿集に新變種としてはじめて載せられたものである（寺西暢遺稿集未發表遺稿，72 頁，1940），歐洲産の *vagus* と同様體に直立長硬毛を豊富に生じてゐるが，軟毛が遙かに少なく且短かい點に於いて *vagus* と異なる．同氏が本種の産地として擧げられたのは北海道（札幌，定山溪，厚別）であるが，習性や棲息場所其他については何等記述されてゐない．私は今迄本州でも數回この蟻を採集觀察する機會があつたので，以下これについて少し述べることにする．

この蟻を私が最初に見たのは，1935 年 8 月 24 日，飛彈側よりの藥師嶽登路に當る跡津川沿ひの土—大多和—有峰路であつた．其所は土より少し登つたばかり，跡津川部落との中間の標高 400 m の場所で，樹のない草の生ひ茂つた斜面を，右手近く川原を見下して横切る日當りのよい山裾であつた．クロオホアリ（*Camponotus herculeanus* subsp. *japonicus*）やクロヤマアリ（*Formica fusca var. japonica*）の盛に歩き廻つてゐる路の傍に太い切株の朽ちたのが横はつてゐた．私が何氣なくその表面をひきはがす

* 體を蔽ふ豊富な長毛に因み，本種に對しこの和名を提唱する．

と，中からこの黒い大きな蟻が何頭もとび出してきて私の手に噛みついた．一見した所それは，色も大きさも形もクロオホアリそつくりだつたが，しかしクロオホアリにしては營巢個所が變だし，それにクロオホアリに比べて遙かに獰猛であつた．よく見るとクロオホアリよりもすつと光澤が强く，その上，頭，胸，腹の背面に，クロオホアリに見られない白い長毛が一面に密生してゐた．

直ちに *vagus* に近緣のものと思はれたが，これがケブカクロオホアリであつた．本州の蟻相に新らしくつけ加へるべきものである．

次に私がこの蟻を見たのは同年7月 21 日東北地方早池峯山麓御山川沿ひの標高約 550 m の場所である．この邊りは道の兩側に濶葉樹が繁つてゐたが日當りはさう惡くなく地面は乾燥してゐた．歩く蟻ではクロヤマアリが最も多く，トビイロケアリ（*Lasius niger*）がこれに次いだ．その間に混つてケブカクロオホアリも歩行してゐたのである．これらの蟻の他，この邊りではムネアカオホアリ（*Camponotus herculeanus* subsp. *ligniperda* var. *obscuripes*）も見つかつたがその數は少なく，やゝ離れてはエゾアカヤマアリ（*Formica truncorum* var. *yessensis*）やクロクサアリ（*Lasius fuliginosus*）も局部的に姿を見せてゐた．前者は少し開けた乾燥地に，後者はよく茂つた樹陰に．尙その外數種の蟻がゐたが何れもさう暗くない疎林にならどこにでも普通な種類であつた．

その後私は澁谷壽夫氏の高野山からの採集品中にこの蟻を見出した．場所は陣ヶ峯 800 m，薄峠道 900～1000 m 等で，クロヤマアリと共に採集されてゐた．

今年（1940）6月のはじめ，私は美濃揖斐川上流，門入の部落（標高約 400 m）で本流に渡した長大な杉の丸木橋のたもとに本種が多く歩いてゐるのを見つけた．恐らくこの古くなつた橋の材中に營巢してゐたものであらう．行動は頗る敏捷であつた．尙附近の草につく蚜蟲に集合してゐる個體も澤山ゐた．近所にはやはりクロヤマアリやクロオホアリが無數に生活してをり，其他トビイロシワアリ（*Tetramorium caespitum* subsp. *jacoti*）

やトビイロケアリも見出された.

京都府下丹波の京大演習林からの澁谷氏の標本の中にも本種の1頭が混つてゐたが，今年の7月の終りに私もこゝに赴いてその棲息場所を見ることが出來た．演習林事務所（須後，標高約360 m）の前には製材所が設けられてをり，その邊りには軌道に沿つて一面に木片，樹皮，大小の丸太等が散亂してゐる．オホヘリアリ（*Euponera solitaria*）やアミメアリ（*Pristomyrmex pungens*）が，切り出されて放置された古いトチの巨木の樹皮下に營巢してゐたり，*Dolichoderus quadripunctatus* subsp. *sibiricus* が樹陰に立てかけられた丸太や割木の上を歩きまはつたりしてゐた．日當りのいゝ地表にはクロオホアリやクロヤマアリ，トビイロケアリ等が走り，これらの間にやはりこの *vagus* の變種の群が混つてゐた．尙樹陰の丸太の上をも往復してゐるものもあつた．大小様々の職蟻は捕へようとすると非常に敏捷に避けて中々つかまらない．しかし，巢をあばいた時とちがつて，人に對し攻擊に向つて來る個體はなかつた．クロオホアリとの區別は慣れゝばその顯著な光澤だけで容易につけることができた.

尙演習林から朽木村を琵琶湖西岸に抜ける途中，能家一上村兩部落間（標高 320m）の道路の傍の炭燒小屋の前に置かれた丸木の上にもこの種類が澤山歩行してゐるのを見出した.

北海道產の本種の個體は，今年8月私は野幌國有林の林緣で採集することが出來たので，本州產の個體と比較して見たが，兩者の間には何等の差異をも見出し得なかつた.

以上の様に，ケブカクロオホアリは廣く北海道，本州の各所に分布してゐるものと見ていゝが，分布地區がこの様に廣いのに拘はらず，どこでも普通に見出すことができるとは限らない．少なくとも今迄見出されたのは割合に限られた局部局部であつて，クロオホアリの様に連續した分布を示してゐない．のみならず一地域の中に比較的接近して同様と思はれる條件の場所が幾つか並んでゐても，その一つだけに，しかもその中の一部分にのみ見出されてゐる．この様な點は甚だ興味ある問題を含んでゐるものと

思はれるのである．棲息場所は上に述べた所で明らかな様に，日當りのいゝ乾燥地で，クロヤマアリやクロオホアリの棲息にも適した所である．陰濕な感じの場所には見付けることができなかつた．たゞクロオホアリとちがつて，營巢個所として古い樹木或は朽木等の存在を必要とすることは間違ひないと思はれる．棲息場所や營巢個所に關するこれらの點並びにその行動等は歐洲產 *vagus* と殆んど異ならない様である．尤も歐洲の *vagus* は屢々家屋の材部に營巢するといはれ，又南歐ではコルク樫に孔を穿つて害を與へるといふ．

ケブカクロオホアリの有翅蟲は私には未だ見る機會が與へられず，從つて飛出の時期についても知る所がないが，歐洲の *vagus* の飛出が盛夏である點からすれば，恐らく同じ時期であらうと思はれる．